

## 麻布大学大学祭特別企画 「東日本大震災：森と海をつながりを考える」の記録

*A record of the forum “The Tohoku earth quake and Tsunami: Considering the linkage between forest and ocean”, a special event at Azabu University Festival 2011.*

高槻 成紀<sup>1</sup>, 野口 理佐子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>麻布大学獣医学部動物応用科学科,  
<sup>2</sup>財団法人C.W.ニコルアフンの森財団, 麻布大学非常勤講師

Seiki Takatsuki <sup>1</sup> and Risako Noguchi <sup>2</sup>

<sup>1</sup> Laboratory of Wildlife Ecology and Conservation, School of Veterinary Medicine, Azabu University

<sup>2</sup> The C.W. Nicol Afan Woodland Trust

### はじめに

標記のテーマで2011年10月29日(土)にフォーラムをおこなった。大学祭において模擬店や音楽、お笑いなどが主流になるなか、大学としてアカデミックな内容の、しかも市民とともに考えることを目的とした企画が必要であると考えて企画した。今後の参考にもなると考え、経緯を含め記録しておく。

### 経緯など

2011年9月に政岡学長から、震災に関連した話題でニコルさんの話を聞けないかという打診があり、本学が掲げる「地球共生系～人と動物と環境の共生をめざして」との関連、またC.W.ニコルアフンの森財団と麻布大学が締結した学術交流協定の一環として調査をおこなっている野生動物学研究室の研究テーマである「生き物のつながり」とを鑑みて、震災と森林をつなげる話題が可能な検討を始めた。

アフンの森財団としても、森林生態系を中心にその保全の必要性をアピールしてきたが、この度の震災を受け、人口構造物では太刀打ちできない自然

の圧倒的な力と、森、川、海のそれぞれの本来の生態系が健全に保たれていることの重要性をいかに伝えるかを模索しているところだった。

高槻がかつて交流していた畠山信<sup>まこと</sup>さんは気仙沼で「森は海の恋人」運動を進める畠山重篤さんのご子息で、カキ養殖を仕事としておられ、今回、被災されたという情報もあったので、畠山さんのお話とニコルさんの森林と海をつなぐ話をしてもらおうこととし、野口を通じて打診し、日程を10月29日とした。9月中旬には内諾が得られた。この時点で野口から、高槻が進める「がんばれナラの木」運動で紹介している詩「ナラの木」(仙台版)の朗読を、宮城県出身の俳優、相澤一成<sup>かずなり</sup>さんをお願いすることとした。また講演のあと、高槻が参加してフリートークをすることとした。

9月21日：森と海をイメージするポスター(資料1)を完成させた。

10月上旬：本学経営企画課広報と連絡をとりあい、会場を新設された生命環境学部1階とすることとし、演題、会場のタイトルプレートなどを作成することとした。

10月25日：高槻、野口、経営企画課(入試・広報)

が集合して、細部の確認をした。相澤さんの詩の朗読のときはスライドでナラの林を背景に、詩を文字で紹介することにした。畠山さんはスライドによるプレゼンテーションをし、ニコルさんは講演にはスライドは使わず、最後にアフンの森を紹介するスライドを使うこととした。また受付は野生動物学研究室の学生4人がおこなうこととし、2人が会場係をすることとした。受付では「ナラの木」の詩のパフレット、アフンの森のパフレット、アンケート用紙を配布することとした。

予定は以下のとおり。

10月29日

12時 大学関係者集合

13時 講演者集合、学長と昼食をとりながら談話

14時 開演

司会 野口理佐子

挨拶 政岡俊夫学長

「ナラの木」(仙台版)朗読 相澤一成

趣旨説明 高槻成紀

講演1 畠山信

講演2 C.W.ニコル

フリートーク 相澤、畠山、ニコル、高槻

会場係 嶋本祐子、大津綾乃、山本詩織、池田有香

## 当日の記録

### 開会

10月29日の会場(生命環境科学部棟1階)において、野口の司会により開会した。会場はほぼ満員であり、話が進むうちに立ち見の人もあるほどになった。最初に政岡学長の挨拶があった。麻布大学とアフンの森財団の学術交流協定が結ばれたこと、本学がかかげる人と動物と環境との共生を考えると、この震災に対する取り組みも重要であり、そこには循環の考え方が不可欠であるという話であった。

### 詩の朗読

これに続けて、相澤さんにより「ナラの木」(仙台版)が朗読された(Fig. 1)。これにより、この集まりが森から始まるということがイメージ化され、また東北のこたばの暖かさや力強さが感じられ、会場に東北地方のことが話されることへの期待感のよう

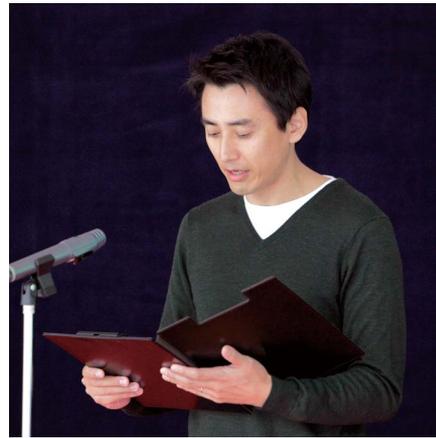


Fig. 1 詩を朗読する相澤一成さん



Fig. 2 挨拶をする高槻

な雰囲気醸成された。

### 挨拶一導入に代えて

これに次いで高槻が次のような挨拶をした(Fig. 2)。相澤さん、朗読ありがとうございました。私は麻布大学の高槻と申します。このフォーラムを企画しました。麻布大学で震災の話をするというのを意外に感じられる人もおられると思うので、少し背景と趣旨をお話します。

ニコルさんに麻布大学に来てもらうのはこれで3度目です。ニコルさんが管理しているアフンの森と麻布大学は学術交流協定を締結して、野生動物学研究室の学生がしょっちゅうアフンの森にでかけて生き物の調査をしています。そこでは生き物がつながって生きているのだということを示すような調査をしています。

私は若い頃、東北大学にいて、宮城県や岩手県で

シカの調査をしていました。実はそのときにニ科尔さんとシカについてのテレビ番組を作ったことがあります。私はその後もずっと東北地方で調査をしています。その東北地方でこれまで誰も経験したことのないような大地震が起き、津波が襲い、原発事故が起きました。私は3月11日以来、心がずっと落ち着かないでいます。大惨事が起きたことは事実のほうなのですが、自分の中でそのことがうまく受け止められないでいました。

そんなときに、私が参加している、あるメーリングリストに、今日皆さんにお配りした「The Oak Tree」という詩が紹介されました。私はそれを読んで強く感動して、訳してみました。そしてそのメーリングリストに送ったのです。そうしたら、思いがけないことに、山形のある人がそれを庄内のことばに訳して送ってくれたのです。それを読んで私はまた感動して、こう思いました。

「この詩を東北のことばで伝えることが被災された人を力づける」と。

そして、東北地方のほかの場所からも訳をするようお願いをしました。そうしたら青森から、岩手、福島、宮城とつぎつぎとそれぞれのお国言葉の「ナラの木」が届くではありませんか。

6月に都内で震災のことを考えるシンポジウムがあり、そのときに相澤さんが仙台地方のことばで読んでくださって、会場の皆さんが感動しました。それで今回もお願いした次第です。

次にお話いただくのは島山さんです。私は彼が学生の頃に出会い、仲良くなりました。その後ご無沙汰していますが、彼のお父さんの島山重篤さんは気仙沼でカキの養殖をしておられます。「森は海の恋人」というキャッチフレーズで、よいカキはよい森があり、川でつながっているはじめてできるという、大きな自然観をもった人です。今回の震災で壊滅的な被害を受けられました。6月のシンポジウムにも来ておられました。私は本当に感動したのですが、あれだけの経験をしながら、「海は大丈夫です。またカキを続けます」と胸を張っておっしゃったのです。信さんはその「ビッグ・ハタケヤマ」の息子さんで、震災を体験されたということで、遠くからお越し頂きました。

その次に話を聞くのはニ科尔さんで、私とは生き

物好きというところで接点があります。私は林を切るとどうなるとか、この花にはこの虫が寄ってくるといった、森の中の生き物のしくみに興味があるのですが、ニ科尔さんはもう少し大きく、山と川と海、日本列島の作りといった視野でも自然をとらえている人です。そして森のもつ力や、人と森のありかたについても考えたり、活動したりしておられます。

こういうわけで、今日私が震災について、この3人においでいただいたことが、だいたいお分りになったと思います。それでははじめに島山さんをお願いします。

#### 島山さんの講演

島山さんはスライドで3月11日の生々しい体験を紹介された (Fig. 3)。いつも海をみている島山さんは地震の大きさと水の動きからただならぬものを感じ、船を沖に出す決意をした。そのときに自分の顔を少しふざけたような表情で撮影していたのだが、口からは「これが遺影になるかもしれないと思った」ということばがもれたのには驚いた。そのあと、波が高くなり、赤い灯台がはじめは海の上にそびえていたのに、船が近づいたときは、先端部しか見えなかった、つまり島山さんを乗せた船は10mもの大波の上にいることになる。その後の波の動きをみて、島山さんは死を覚悟し、船を離れる決意をしたという。そして実際に海に飛び込んで200mほど泳いで陸にたどり着いたという。島山さんには独特のユーモア感があり、陸で撮影した写真を紹介しながら「すみません、この前はちょっと忙しかったものだから、写真がありません。」とこともなげに言った。生



Fig. 3 講演する島山信さん

死の境にあって写真が撮れないことなど言うまでもないのにこういうことを飄々と語る。私は、もし自分ならどうだろうと思わずにはいられなかった。津波の直後には瓦礫の中の遺体も見たと語る口調は苦渋に満ちていた。

その後、「森は海の恋人」プロジェクトでおこなっている活動が紹介された。木を育てるには100年かかるが、人は20年で大人になるのだから、人を育てるほうが時間がかからないということばが印象的だった。子供を海に招き、カキを見せ、カキを育てるプランクトン入りの海水を飲ませるなどの体験学習をするようすなどが紹介された。気仙沼の「海の恋人」である室根山でおこなってきた植樹祭を今年はできないと思っていたところ、参加者のほうから景気付けにぜひやってほしいという声があがっておこなったが、今年は大漁旗が失われたので、旗が少なかったという話も印象的だった。

震災後に海岸線が変わり、沈降したはずの砂浜に波が砂を運んで、今までよりも内陸まで砂が堆積して、むしろ砂浜が広がったということであった。そして復興への決意が語られた。

話の最後に、「すみません、いつも見ている海で、なんとも思っていないんですが、こうしてスライドで見ると、あの時のことが思い出された胸がどきどきしてしまって」と言われた。

#### ニコルさん

演壇を降りる畠山さんに大きな拍手がわき、これを受けたニコルさんの話が始まった (Fig. 4)。開口一番話されたのは、その畠山さんの話を讃えるとともに、トラウマは無理に抑え込もうとする必要はないというやさしいことばであった。そのあとで話されたのは、カナダでの自分の経験で、サケにまつわる話だった。まず日本列島には北海道から九州北部までサケが遡上する川があった事実を紹介した。気温でいえばサケには暖かすぎる北九州にサケがいたということは、上流から流れてくる水だけでなく、地下の伏流水が川の側面からにじみ出ているからだという。そのことは「防災」とされるコンクリートの三面張りの工事がいかにまちがっているかを示している。

カナダでの経験は、川の上流に海由来の窒素15と



Fig. 4 熱弁をふるうC.W.ニコルさん

いう安定同位体があるという事実で、これは「水は低きに流れる」とする物理学では説明できない。それは膨大な数のサケが遡上することによるのである。サケが体全体で海を山に運ぶということである。サケは産卵すれば死ぬから、大量の「海」が川にもたらされることになる。それだけではない、クマがいてサケを食べる。クマ同士には強いなわばり意識があり、サケをとる川ではいさかいが起きるから、サケをひとりで食べるために林に行く。そこでイクラなどおいしい部分から食べるのだが、ニコルさんが写真撮影をしようとしていたら、クマが突然思い出したように「あ、あの川でライバルのクマがサケを食べている」とばかり川に戻ったそうだ。そのとき、ニコルさんが、立ち上がって思い出したようなクマの表情を演じてみせたが、実にユーモラスで会場から笑い声が聞こえた。私たちはニコルさんの巧みな話によって自然の仕組みや、サケ、クマの働きのおもしろさに引き込まれていった。

さて、こうしておびただしい量のサケが森に運ばれて捨てられる。クマは糞をする。そのためこの時期の森は臭くて、とても物を食べたりできないほどだという。しかし、科学者の明らかにしたことは、こうした海の成分は地面に入り、やがて木に吸収されるため、木の材に遺されていて、「生長錐」という特殊なドリルで木から細長い鉛筆のような材を取り出すと、どの年代に海の成分が多いか少ないかわかるということだった。

このことのもたらす効果は明らかだった。もし川がサケの遡上を妨げれば海の物質は森に届かない。その結果、木の肥大成長は著しく悪くなる。

川と森に関連したもうひとつの話は、標高2000mほどの山の森林を皆伐すると、7週間かかって海に達していた水が、なんとわずか2日で達してしまったということだ。初めはその結果を聞いても信じられなかったが、まちがいなかった。そのために自然保護団体だけでなく、漁師からも森を守れという声が大きくなり、森林伐採が抑制されたという。もちろん私たちは、この話を畠山親子が推進している「森は海の恋人」のことと重ねて聞いた。

ニ科尔さんは話のあとでアフアの森の映像を紹介しながら、よい林はよい管理によるのだという実例をあげて話をし、最後に「心の森」プロジェクトについても紹介した。森のもつ力、人と森とのつながりについて会場は深い感動に包まれた。

#### フリートーク

高槻は、震災後であるにもかかわらず、冷静で、自分がたいへんであるにもかかわらず周囲への思いやりを示した東北の人に驚嘆したことを聞くことから始めた。打ち合わせなしの質問だったので、相澤さんも畠山さんも虚をつかれたようだったが、畠山さんからは、考えておこなったわけではなく、おもむくままにしたらあんなのだということであった。これについてニ科尔さんは、「どこの世界にもあつた立派な態度をとる人はいるにはいるが、しかしそれは少数であつて、皆が皆そうであるということは珍しい。これが例えばイギリスであれば暴動が起きていただろう、私は日本人としてあの人びとの態度を誇らしく思った」と語った。

また高槻は「海をよく見ていれば異変は感じ取れる」という畠山さんの発言に、それはどういうことかと質問した。畠山さんの答えは、ひとつひとつを理屈と言葉では説明できず、長年の直感のようなものがあつて、光や風をふくめ、トータルに感じる感覚から来るものだということがあつた。そうであれば、我々は「見れども見えず」ということになる。このことについては、私は生態学者として自然を見ることについては共感するものがある。学生と山を歩くと「見れども見えず」は無数にある。海を相手にしている漁師には海の表情が読み取れるのであろう。

会場からもいくつか質問や発言があつた。ある麻

布大学の先生は「畠山さんは4月の中旬、まだ自分が被災のさなかにありながら、新聞にほかの人の支援をしていると明るい表情で出ていて、自分ならとてもできないと思った。男としてかっこいいと思った。」と発言され、畠山さんは「自分はニ科尔さんみたいなカッコいい男になりたいという気持ちがあるからかもしれない」ということを語った。ニ科尔さんは「信君のお父さんもそうじゃないか。いい顔だよ。俺はやると言ったらやる、と言える男はそういう顔になるんだ。」と言った。私も今年の6月に都内でおこなわれたシンポジウムに、震災後初めて公式の場所に来たという畠山重篤さんが、電気も水道もないのでひげも伸び放題で失礼しますといいながら、海の話がされたときの、「いい顔」を思い出した。

別の人は地元を離れる人のことを発言した。これに対して畠山さんは、現実には去った人はあること、しかし残った者でコミュニティーを作って機能させていく抱負を語った。ニ科尔さんはウェールズの石炭捨て場が荒廃していたが、そこで育つた若者が地元にもどつてきれいにし、それでまた人がもどつてきたことを話し、「いい町を作れば必ず人はもどつてくる」と語った。

高槻は、戦後の日本は自然を管理し、災害を抑え込もうと思つて上がつていたのではないかと、今回の震災は自然に向かい合うことがいかに無謀であるかを教えたのではないかと発言した。相澤さんは言葉少なめだったが、これについて、地元の名取市は北部のリアス式海岸と違い、高台がないため、逃げ場がない。津波に対して防潮堤を作るといふ動きがあるが、防潮堤が訳に立たないことは誰にもわかつたはずで、防災教育や、避難施設の充実をすべきだと発言した。そして地元に対して役立ちたいという熱い思いを語った。

高槻はわれわれ東北地方にいない者が何をすべきかを尋ねた。畠山さんからは自分たちのことをいっしょに考えて欲しい、地元でも何から手をつければよいかわからないでいるから、よいアドバイスをしてほしいという発言があつた。私はもっと地元から具体的な要望を発信をしてもらい、それに答えるためのシステム作りのようなものを充実すべきだと考えていたので、少し意外感があつた。

高槻は、7月に岩手県を訪れたときの、変わり果

麻布大学 大学祭特別企画

## 東日本大震災 森と海のつながりを考える



Fig. 5 フリートークを終えた4人 相澤、畠山、ニコル、高槻

てた町とそれと対照的な新緑の美しさのギャップに当惑したこと、今年の春は被災した人びとにとっていつもと変わらないことの意味を考えさせたであろうことを話した。そしてよい形でこの日本の自然と共存することの必要性を話した。

こうして、短い時間ではあったが、森と川と海、人と自然とのあるべき姿について深く考える充実した時間をすごすことができた。最後に司会の野口が、誰もがおかしいと思いながら別のことが進んでしまったという意味では、太平洋戦争も、自然破壊も、原子力発電のあり方も、そして今進んでいる復興計画にも共通のものがあり、その体質を改める必要があるだろうと締めくくった。

## アンケート

参加者にアンケートをとった。内容と結果は以下の5問であった(資料2)。

1) 本日のフォーラムどこでお知りになりましたか  
(複数可)

約半数が大学祭のパンフレットをみてであったから、フォーラムを目的に来たと言うより大学祭に来ておもしろそうだから参加したということであろう。大学のホームページが16%であり、この割合を増加させる工夫が必要だと思われる。

2) 本日のフォーラムの感想をお聞かせください

63%が「非常に満足した」と答えており、「満足した」と合わせると85%ほどになり、満足感は大き

かったと判断された。

3) プログラムで特に良かったものあればお聞かせください。

C.W.ニコルさんの講演が37%で最も多かったが、朗読や畠山さんへの支持も多かった。

4) フォーラムの御感想をお聞かせください。

5) 御感想、メッセージ、震災への想いなど、御自由にお書きください。

この2つの設問は重複があるので、区別せずに整理した。

震災そのものへの衝撃、その意味を考えさせられたという意見が最も多かった。具体的なものをあげると、「畠山さんの話を聞いて改めて震災の大変さを感じました。」「地震の影響は町だけでなく人の心の中までにも及んでいるのだと実感しました。家や船が沈んでいる写真には衝撃を受けました。震災から約7ヶ月がたち当時ニュースで見た衝撃的な町の姿や被災者の方々の被災状況を見た時の気持ちを忘れかけていることに今日講演を聞いて気付きました。」「私の実家も三陸なのでとても人事ではなく為になるお話を聞けました。」「海は私達人間が暮らす町と比べ修復が早く既に元の状態に戻っているようですがあの時の気持ちはいつまでも忘れてはいけなかった。」「などがあつた。

ニコルさんは知名度が高く、講演の内容そのものも魅力的だったので、印象づけられたという記述が多かった。例をあげると「自然と私たちはすべてに

おいてつながっていかないものなんて1つもないと改めて思いました。私は将来自然の役に立ちたいです。自然と共に生きることをテーマに生きていきたいです。」「森と海のしゃけの話は自然界の営みの偉大さを感じます。森の育成の大切さを感じます。ニコル先生の講演は具体的で良かったです。」「C.W.ニコル先生の最後の話を聞いて涙が出てしまいました。私もこういう活動がしたいです。」「自然と人間の付き合い方を改めて考えさせられました。とても良い機会となりました。」などである。

企画そのものに対する評価もあった。例えば「大学で今回のような企画をしていただいて大変うれしかったです。ありがとうございました。これからもお願いします。」「貴重なお話をたくさんうかがうことができました。どうもありがとうございました。」「大変良いフォーラムでした。今後の環境問題を考えていく上で大変参考になりました。」「この企画毎年続けて頂ければ・・・と思います。自然の大切さをたくさん方々に伝えていくチャンスになれば有難く思います」などである。

そのほかの意見として以下のようなものがあつた。「畠山氏が、会場に若い人がいない、と言われていました。私も同感です。このような講演、フォーラムこそ大学の単位として参加させるほど、これからの若者に知ってもらいたいほど意味のあることだと思いました。」「フリートークはある程度ざっくりとでも、トークテーマが明確だと分かりやすいものになったのではないかと思います。」「今後とも自然環境、生物多様性、あるいは生態系保全等をテーマとするフォーラムの永続的な開催を期待しております。」「震災以降、改めて自分の大切にしていきたいことが浮き彫りになったと感じています。自然の強

さ、たくましさ、そして優しさに日々感謝しながら生きていきたいと改めて思いました。貴重なお話しを聞かせて頂き本当にありがとうございました。』

企画した側からの感想、反省点、今後のことなどをまとめておく。未曾有の大災害のあとであり、さまざまな企画がおこなわれる中で麻布大学らしさを考えてこの企画を考えた。当日は被災した動物についての企画もあり、全体として麻布大学らしさが出せたと感じている。内容もアンケートによれば満足度も高く、ニコルさんの講演を中心に強い印象を残し、フォーラムの成果を確認できた。しかし広報活動は十分であったとはいえないと感じた。とくに麻布大学の学生の参加が非常に少なく、学外参加者からそのことを指摘されたことは企画者としては残念なことであつた。このことの分析と改善はぜひしなければならない。またフリートークはまったく打ち合わせなくおこない、そのことによるアドリブ的なよさは十分にあつたと思うが、フロアとのやりとりなどについてはアンケートをとって意見を集約して、ゲストに意見を聞くなどの工夫をしたほうがより充実したかもしれない。またアンケートの様式も意見がとりこめるように設問を具体的にしたほうがよいと思った。しかし全体としては企画に対する評価は高く、今後さらに継続して欲しいという意見が多かつたので、麻布大学らしさを前に出して大学祭の質を高めたいと思う。

謝辞：フォーラム開催にあたっては政岡麻布大学学長はじめ各位のご理解、ご支援をいただいた。写真はすべて麻布大学による撮影である。また学外から朗読や講演にお越し頂いた相澤一成様、畠山信様、C.W.ニコル様には衷心よりお礼申し上げます。

資料1 ポスター。ニコル氏の写真はアフアの森財団の許可を得て前年の大学祭のものと同じものとし、継続性を意図した。右側には森林の写真、枝についた水滴、小さな流れを配して、森林から水が流れてくることを象徴した。これらはすべて高槻がアフアの森で撮影したものである。そしてその下に三陸のリアス式海岸を置き、山に発した水が海に達したこと、津波被害にあった場所を示した。

麻布大学 大学祭 特別企画

東日本大震災：  
森と海のつながりを考える

C. W. ニコル氏(アフアの森財団)  
畠山 信氏(気仙沼市)



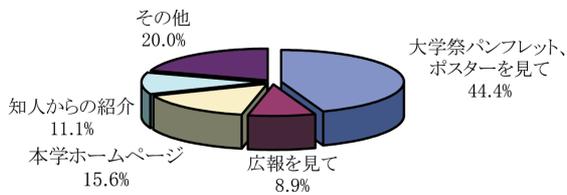

2011年10月29日(土)  
14:00より  
麻布大学  
無料 問合せ 042-769-2032

麻布大学はアフアの森財団と学術交流協定をむすんで活動しています。大学祭ではC. W. ニコルさんと気仙沼でカキ養殖をしている畠山さんに、森と海が繋がっていることについて話し合いをしてもらいます。

共催 麻布大学, C.W.ニコル・アフアの森財団

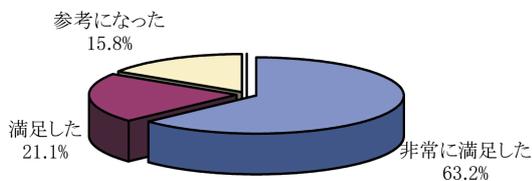
資料2 大学祭特別企画 森と海のつながりを考えるアンケート

I 本日のフォーラムどこでお知りになりましたか(複数可)

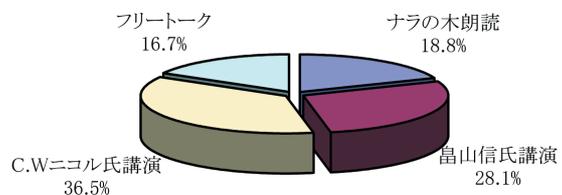


※その他  
講演会(東日本大震災における動物たちの現状)で知りました。  
学祭実行委員をしている娘から  
Twitter  
畠山さんのブログの告知を見ました。  
家族からの紹介  
会報  
アフアの森(会員です)のホームページで  
メーリングリスト

II 本日のフォーラムの感想をお聞かせください



III プログラムで特に良かったものあればお聞かせください。



IV フォーラムの御感想をお聞かせください。 略(本文参照)